

NEWSLETTER

日本保健物理学会

No.17 October, 1998

目次

企画案内.....	1
シンポジウム「保健物理の将来を考える」.....	1
理事会報告.....	2
企画委員会報告.....	2
編集委員会報告.....	2
専門研究会報告.....	3
第2回「自然放射能と保健物理」専門研究会報告.....	3
リスクベース防護基準専門研究会の活動計画.....	3
若手研究会活動報告.....	4
学会掲示板.....	4
IRPA - 10準備活動状況(1998年7月~).....	4
保健物理人材育成検討委員会報告.....	5
インターネットグループ活動報告.....	5
学会刊行物の案内.....	5
催し物案内.....	5
第30回放医研シンポジウム「放射線の生体影響とその修飾 - 実験発がんを中心として -」.....	5
第2回国内EMF研究者ネットワークワークショップのご案内..	6
テュビアナ博士講演会.....	7
第7回東京大学原子力研究総合センターシンポジウムのお知らせ.....	7
京都大学原子炉実験所平成10年度専門研究会.....	7
会員コーナー.....	10
シンポジウム「保健物理の大学院教育の現状と将来」に参加して.....	10
若手研夏期セミナー「環境ホルモンに関する勉強会」に参加して.....	10
その他.....	11
NEWSLETTERへの会員投稿のお願い.....	11

企画案内

シンポジウム「保健物理の将来を考える」

日本保健物理学会は、1962年に前身の日本保健物理協議会が発足して以来、今年で36歳になります。設立当時、個人会員120名、法人会員2社であったのが、今日ではそれぞれ1100人、69社へと拡大しました。しかし、会員の高齢化や原子力関係の環境の変化によって保健物理学会のとりまく状況は決して明るいものではありません。この状況を深刻に受けとめ、現状分析を行い、学会として、さらには保健物理研究の将来を展望していくためのシンポジウムを企画しました。多数ご参加いただき、建設的な意見を交換したいと考えています。

1.日時：12月18日(金)午後1時半から5時

2.場所：日本自転車会館3号館(三会堂ビル隣り)

電話03-3582-3311(代表)

東京都港区赤坂1-9-3 日本自転車会館3号館

地下鉄 銀座線・南北線「溜池山王駅」下車(出口9)3分

地下鉄 丸の内線・千代田線「国会議事堂前駅」下車7分

「溜池山王駅」よりお越しの方は、溜池薬局を左折して直進され日本自転車会館3号館入り口よりお入りください。

「国会議事堂前駅」よりお越しの方は、あざき歯科を右折して直進され日本自転車会館3号館入り口よりお入りください。

3.プログラム

座長 草間朋子(会長)

(1)保健物理学会の現状と展望

石黒秀治 理事

(2)保健物理学会誌の現状と展望

中村尚司 編集委員長

(3)保健物理学会ライセンス制度の提案

鈴木征四郎(元専門研究会主査)

(3)保健物理研究の現状と展望

飯田孝夫 理事

(5)保健物理研究の方向性 - 原研保健物理部の将来構想 -

加藤正平 理事

(6)保健物理研究の魅力とは - 若手会員の意識 -

石森有 若手研主査

総合討論

4. 参加費 会員1000円、非会員1500円

5. 連絡先：山口恭弘

(日本原子力研究所保健物理部、TEL029-282-5629)

注：事前登録は不要です。

当日、会場受付へ直接お越しください。

理事会報告

平成10年度第2回理事会(平成10年7月24日)

例年開催している夏の企画行事として、8月29日に「保健物理の大学教育」を実施することとなった。これについては、時期とテーマの関係で結果的に出席者が少ない結果となり反省点を残した。専門研究会は活動の成果を報告書として作成しているが、その価格の設定について原則赤字がでないように設定することを確認した。高度人体ファントム専門研究会の報告書の価格については、勉強会等の会場での価格は1200円、学会事務センターに申し込む場合は2000円プラス税金郵送費用別とすることとした。国際非電離放射線防護委員会(ICNIRP)が報告書を出しその勉強会を行った際、報告書の概要を、学会誌に解説記事として掲載するよう編集委員会に依頼することとした。学会の観点からいろいろな社会的課題に対して積極的に活動するという方針の一環として、管理区域設定技術指針検討委員会の設置し、ICRP 新勧告の取り入れを機会に種々の管理区域に係る技術的考え方を示す指針を検討することとなった。委員には、いろいろな施設の関係者を含めるような構成にした。今年5月の第33回研究発表会についてまとめが報告され、また第38回学会総会議事録が承認された。前年度、論文賞及び奨励賞受賞候補者募集を行ったが、応募がなかったため今年度も募集することとなった。、選考委員として、委員長：稲葉氏(放医研)、委員：市川龍資氏(元放医研)、沼宮内弼雄氏(放射線計測協会)、古賀祐彦氏(藤田保健衛生大)が承認された。今年度は日本保健物理学会役員選挙の年にあたり、第1回選挙管理委員会開催と選挙の公示内容が報告された。関連して、会員名簿作成日程が審議され、会員名簿作成カード締め切りを9月30日とするが、動燃については新組織設立のため、動燃に限って締め切り後も受け付けることとなった。会員名簿作成の担当理事は三ヶ尻理事に決まった。日本学術会議放射線科学専門委員会の活動報告があり、保健物理研究センターの方策を提案していくこととなった。第34回研究発表会の準備状況について草間大会長から準備の報告があった。

平成10年度第3回理事会(平成10年9月22日)

インターネット化の整備の検討がなされているが、ニュースレターのインターネット化についてはホームページに掲載し、メーリングリストを利用することについては対象者の抽出方法、運営管理の方法について、さらにインターネット委員会において検討することとなった。企画行事について、「クリアランス」のテーマは、来年2月、「環境基準」をテーマにする案がだされた。学会の財政の改善の一環として、広告代理店の見直しに関して、手数料30%、広告版下の所有権の明確化、広告主との契約内容の明示を義務づけた契約書で契約できる会社を選定することとなった。その結果、科学技術社を代理店とする契約書案を、価格表を添付することで承認した。今回で最後となる第10回江藤記念賞の推薦について、保健物理学会から1名推薦することで手続きを進めることとなった。IRPA10 準備に関して報告があった。研究発表会実行委員会として、約50万円を

IRPA10 実行委員会に寄付をすることを承認した。放射線被爆者医国際協力協議会(HICARE)が10周年にあたることからこれにあわせて国外委員招待を含め積極的に支援する予定であることが報告された。選挙管理委員会活動について、投票用紙案が紹介され、集計が確実に、混乱無くおこなわれる様式に改良することが提案された。学会の社会的貢献と活性化についていかに進めるべきかを検討した結果、社会貢献と活性化を目的として、企画委員会において、具体的活動とそれを実行する検討委員会の様なものを設置することを検討することとなった。

(総務担当理事 原研 加藤正平)

企画委員会報告

第2回の企画委員会は、9月11日に原研本部で行われた。主な議事内容は次の通りである。

- 1) 管理区域設定技術指針検討委員会が平山英夫委員長、山口恭弘幹事とするメンバー8名で平成11年9月の提言書のまとめをめざしてスタートすることが報告された。
- 2) ニュースレターをインターネットで配布する計画案の説明があり、理事会で最終承認を得て来年度から実施することにした。
- 3) 若手研究会 1998 年度夏期セミナーに対して、派遣講師の旅費援助を行うことにした。
- 4) 古くなった学会刊行物のうち、「ICRP 新勧告検討委員会報告書(1994.11)」および「加速器放射線防護の現状」の処分を実施することが了承された。
- 5) ICNIRP のガイドラインの翻訳版については、印刷物ではなく、学会のホームページ上に PDF ドキュメントとして公開する方向で検討することとなった。ガイドラインの内容については概要紹介を学会誌に掲載することになった。
- 6) 保健物理イン敦賀が来年の2月に予定されているが、今回は8月の企画行事を関西地区で行ったので、企画行事としては参加しないことにした。
- 7) 11月の企画行事について検討した結果、クリアランス、BEIR-VII、環境ホルモンなどの環境基準、を候補として検討することになった。
- 8) 次回開催は、11月26日(金)午後1時半-5時に原研本部で行う。

(幹事 甲斐倫明)

編集委員会報告

本年度第2回目の委員会が、9月7日午後学会誌刊行センター会議室で開催されました。主な内容は次のとおりです。

1. 前回議事録を2箇所訂正の後承認した。
2. Vol.33 No. 3の掲載内容を確認した。
3. Vol.33 No. 4の目次案が報告された。

4. 投稿論文の審査状況を確認した。

論文11件(うち、審査終了4件、審査中6件、ペンディング1件)。保健物理学会の研究発表会で、座長から発表者に投稿のお願いを依頼した論文のリストが報告された。

委員長から、論文審査を早くする働きかけの効果が現れているが、その結果、審査中の論文数が少なくなっているのので、各委員には関係する研究者に保健物理誌への投稿を強く働きかけてほしい旨の要請があった。

5. 企画記事に新たに10件追加した。

6. 資料紹介

小山委員から、京大原子炉はより早い情報公開の手段が別にできているとしてこのコーナーを中止したい旨の申し出があり、これを了承した。原研、動燃および放医研はこのまま継続する。(東北大学 山寺亮)

専門研究会報告

第2回「自然放射能と保健物理」専門研究会報告

期日：1998年8月29日；9:00-12:00

場所：近畿大学ゲストハウス2階会議室

講演演題：

「この研究会の目指すもの」

福井県原子力環境監視センター 早川博信

「堺におけるBe-7の降下量及び大気中濃度」

大阪府立大学 恵和子

「環境における中性子の測定と評価」

近畿大学 小川喜弘

「銀河や地球の歴史を計る —自然放射能」

九州大学 大崎進

出席者：

占部逸正(福山大学工学部)、飯田孝夫(名古屋大学工学部)、稲垣昌代(近畿大学原子力研究所)、大崎進(九州大学アイトープ総合センター)、小川喜弘(近畿大学原子力研究所)、恵和子(大阪府立大学先端科学研究所)、安岡由美(神戸薬科大学)、山西弘城(核融合研究所安全管理センター)、野本健二(日本原電放射線管理室)、早川博信(福井県原子力環境監視センター)

発表概要

5.1「この研究会の目指すもの」

「放射線」と「放射能」とがマスコミ等では混乱して使われているが、それをただすのがこの会の目的ではなく、そのような混乱があることを前提として、なにか説明するとき、そこで使われている言葉がなにを問題にしているのかを把握して対応することが大切である。

「分からない」といわれたとき、なにを知りたいのか、なにが分かれば分かったことになるのか、等をはっきりさせることがまず必要である。

放射能・放射線に関して、一般のひとは「怖い」というのが第一にあるが、身体に対する影響を説明しようとすれば、最終

的には「リスク論」で説明することになるが、これはとても難しい。

5.2「堺におけるBe-7の降下量及び大気中濃度」

大阪府立大学先端科学研究所 恵和子、松並忠男(大阪府立大名誉教授)、他

環境モニタリングの一環として当所堺において長年、放射性核種(γ 放射体)の降下量及び地表大気中濃度の観測を続けている。 ^7Be は大気中窒素、酸素の宇宙線破砕反応により生成される。堺における ^7Be の地表大気中月間平均濃度及び月間降下量の変動の特性及びその要因について報告した。 ^7Be の地表大気中濃度の季節変動特性と低緯度からのエアロゾル輸送、 ^7Be の地表大気中月間平均濃度及び年間降下量の変動と太陽黒点数変動、 ^7Be の月間降下量の降水量への依存性、 ^7Be のwashoutとrainoutについて報告した。なお、超新星の爆発の影響についても考察した。

5.3「環境における中性子の測定と評価」

既成のHe-3中性子検出器を参考にして、He-3中性子検出器を製作し、それに厚さの異なるポリエチレン減速材を組み合わせ、数種類のエネルギー-応答の異なる減速材付き環境中性子検出器を作成した。現在、加速器をもつ施設は増加しており、環境での中性子測定の必要が生じつつあるので、この研究を行った。実用的な検出器の試作は完了したので、今後は様々な環境で測定を行っていく予定である。

5.4「銀河や地球の歴史を計る —自然放射能」

45億年から数10日までの年代測定法について、総合的な発表が行われた。この研究会の趣旨からいって、このような様々な年代測定法があることを広く知ってもらうことは有益なことである。発表者の大崎氏の目標の一つに、研究会が継続する2年間に、放射能(あるいは放射線)を利用した、「おもちゃ」をつくることがある。そのような目標を考慮して発表演題が選ばれている。

(福井県監視センター 早川博信)

リスクベース防護基準専門研究会の活動計画

本研究会では、放射線防護基準として十分に説得力のあるリスクベースとは何かについて議論を深めつつ、将来の防護基準を(1)どのような考え方に基づいて、(2)どのような方法によって設定すべきかについて、具体的に検討することを目的として活動をすすめています。インターネットを活用した電子メールによるネットワークフォーラム方式を活用して、各委員の意見を相互に交換し、活発な議論を積み重ねています。意見を交換するなかで、(1)個人リスクと集団リスクの考え方の違い、(2)リスク認識と意志決定(者)との関わり、(3)リスク概念に含まれる本質的な不安(不確実で予測できない未来への恐れと希望)、(5)不確実性を数量化する営みとしてのリスク評価の在り方、などがトピックとして挙がっています。

今年の目標としては、(1)現在の放射線防護基準がどのように設定されたか、とくに放射線疫学・放射線生物学の見解および

リスク管理をどのように/どのようなバランスで組んでいるのかをリスク概念の歴史的変遷と照らしつつレビューすること、(2)放射線以外の化学物質でリスクベースの管理を行っているところではどのように設定されたか、とくに、毒性学、疫学などの生物学的情報とリスク管理上のバランス、放射線と違って人のデータがない状況で放射線と異なる点は何かなどをレビューすること、(3)現行の放射線防護基準に対する誤解、批判、期待をそれぞれの背景も含めて分析をすること、です。自由に討論によって思索をすすめて、まとまったレビューとして成果をだせるように、議論のポイントを収斂させようとしているところです。

今後とも、本研究会の活動にご理解とご支援をいただきますようお願いいたします。また、本研究会の活動にご意見のある学会員があらましたら(ご批判であれば是非に)、幹事まで電子メールでお知らせ頂ければ幸いです(アドレスは masa_doi@nirs.go.jp です)。

(放医研 土居雅広)

若手研究会活動報告

若手研究会は企画委員の専門研究会の一つとして 1987 年に設立されました。本研究会は、35 歳以下の会員で構成されており、現在会員数は 31 名です。

例年、若手研では夏期セミナーを開催し、メンバーの関心事やその時々話題に関して、自由に議論を行っております。今年度は 9 月 13 日に、「環境ホルモンに関する勉強会」ということで、岡山大学医学部衛生学教室の小河孝則先生をお招きして、ご講演いただきました。今後この問題に関する研究が進めば、我々はこの問題に関して多くの関わりをもつことになることと考へ、現在の会員の興味方向等を考慮し、このテーマを選定いたしました。勉強会に関しては、西地区幹事の稲垣氏の報告をご参考下さい。

また、勉強会にあわせて開催された若手研会合において、以下のことが承認されました。

- (1) 東京大学の菊地優子氏の東地区幹事就任
- (2) 若手研インターネット・グループ発足

若手研インターネット・グループは、当面の目標を「若手研ホームページ開設」とし、ホームページの内容検討のためのワーキング・グループとしますが、検討を通じて「若手研としての情報発信のあり方」や「意見の交換・交流」について考えていきたいと思っています。現在、主査と幹事 2 名に加えて、大分県立看護科学大学の赤羽恵一氏、元・日本原子力研究所特別研究生の渡邊美紀氏、核燃料サイクル開発機構東海事業所の竹安正則氏が委員となっております。

そのほか、勉強会にあわせて動力炉・核燃料開発事業団人形峠事業所(現・核燃料サイクル開発機構人形峠環境技術センター)の施設見学会が開催され、人形峠展示館、濃縮原型プラント、安全管理課施設の見学をしました。ご対応いただいた動燃関係者の皆様に深く感謝いたします。

若手研究会では会員を広く募集しております。35 歳以下の学会員であれば、どなたでも入会資格があります。ご関心のある

方は下記の主査あるいは地区幹事まで、お気軽にご連絡下さい。

主査：石森有

核燃料サイクル開発機構 人形峠環境技術センター 安全管理課

TEL: 0868-44-2211, FAX: 0868-44-2851

E-mail: yuu@ningyo.pnc.go.jp

東地区幹事：菊地優子

東京大学医学部 量子環境医学教室

TEL: 03-3812-2111 ext.3600

E-mail: ykuchi@m.u-tokyo.ac.jp

西地区幹事：稲垣昌代

近畿大学 原子力研究所

TEL: 06-721-2332, FAX: 06-721-3743

E-mail: genken@ned.kindai.ac.jp

(主査：サイクル機構人形峠 石森有)

学会掲示板

IRPA - 10 準備活動状況(1998 年 7 月 ~)

当面の大きな準備活動としては、第 2 回国際プログラム委員会(ICPC)の開催、第 1 回国際組織委員会(ICOC)の開催及び第 2 次アナウンスメントの作成発送です。それに備え、6 月 5 日総務、財務、募金担当幹事会。7 月 2 日第 3 回幹事会、8 月 25 日に第 3 回実行委員会を開催、9 月 10 日に第 4 回国内プログラム委員会開催、9 月 24 日に第 2 回組織委員会を開催しました。これによって当面の活動の基本的なスケジュール、予算、プログラムの他、新たに学術会議との共催と名誉総裁に皇族をお願いすることが承認されました。

第 2 次アナウンスメントの作成発送については、第 2 回実行委員会までに第 1 次案を組織委員会が審議、第 2 回 ICPC 委員会でプログラム関係を検討、12 月の第 1 回 ICOC で承認の後、1999 年 1 月に発送することとなりました。広報小委員会がまとめ役ですが、内容はプログラム、論文募集要項、機器展示要項、ソーシャルプログラム、交通、ホテル、観光等の情報など多岐にわたるため、各小委員会が分担して準備協力することとなっています。親切内容にしようするとページ数が増加し、送料がかさむことになり、今後このあたりの検討も必要になってきます。

プログラムについては ICPC が決めることですが、できるだけ日本の意見を反映させるため国内プログラム委員会、実行委員会などで検討しています。これらの検討において、時間割、プログラム構成、特にポスター発表の実施方法、日中韓から推薦する座長、講演者を検討しました。これらの意見は直ちに、インターネットで国外委員にも知らせました。予算に大きく関連する会議の講演者、座長等への旅費、お礼をどうするかについても検討しました。また、発展途上国からの参加促進が重要であることから、支援策として参加料半額を 100 名に対して適

用することとし、アジア地区にその3分の2当てることとしました。どのような手順で決定するかを今後つめることとなりました。

その他、宿泊、行事の調査も引き続きおこない、これも第1次アナウンスメントに反映されます。国際会議では市民公開プログラムが放射線被爆者医国際協力協議会(HICARE)を中心に開催される予定であり、これについてもより具体的にHICAREと調整しながらすすめることとなります。予算については、国外委員旅費の関連機関による支援や学会会議の共催を考慮しても、先行きは非常に厳しい見通しです。そのため、予算執行をできるだけ切り詰めていかなければなりません。

(IRPA10 実行委員会総務担当 原研 加藤正平)

保健物理人材育成検討委員会報告

当学第2回の委員会は、8月29日に近畿大学で、会企画行事「保健物理の大学院教育の現状と将来」シンポジウムの形で行われた。シンポジウムでは、委員会幹事の甲斐委員がこれまでの委員会活動の報告を行い、続いて工学系、医学系、理学系各大学院の現状と将来計画が報告された。

工学系大学院では原子力・保健物理講座を有する名大大学院の現状が飯田委員によって紹介され、より活発な研究・教育の実践が人材確保の観点から重要との考えが述べられた。医学系大学院では、前越氏により医学部保健学科の新設に伴う将来計画が紹介され、理工学の医学への応用のみならずその安全性への理解が不可欠であるとの認識が示された。理学系大学院では、小村氏により金沢大低レベル放射能実験施設の将来計画が紹介され、保健物理学会とも協力して是非実現させたいとの意見が述べられた。

これらの報告に対して、保健物理大学院教育に期待するとして、京大大学院中川氏による保健物理の新分野の可能性に関するコメント、動燃古田氏による社会的に認められる保物の人材育成の重要性に関するコメント、若狭エネ研辻本氏による保健物理関係者の社会的認知の重要性と育成機関に関するコメント、などをいただいた。いずれも保健物理の現状を反映して切実な課題で、フロアからもこれらに対して積極的な意見が出された。

最後に、これまで、当学会が懇談会形式で推進してきた保健物理研究センターについては、保健物理の人材育成の重要性を認識してしばらくは拠点となる大学等の活動を支援しつつ構想を再構築することが重要との意見が出された。

委員会としてはこれまでの議論を踏まえつつ、今回のシンポジウムでの議論を参考に、保物の人材育成の進め方と保健物理研究センターについて更に検討する予定であるが、こうした議論にご関心の有る方は委員会のメンバー、或いは直接著者宛にご意見をお寄せいただければ幸いです。

(福山大学工学部 占部逸正)

インターネットグループ活動報告

NewsLetter 配布にかかる郵送料、環境資源の削減を目的として、今年度、ダウンロード計画(学会のホームページからインターネットを通して NewsLetter を入手する)について検討を

重ねてきました。計画では、郵送希望者とダウンロード希望者とを選別し、郵送希望者には従来通り郵送で送付する予定でしたが、残念ながら、学会事務センターの現在のシステムでは、NewsLetter を郵送で配布する会員と配布しない会員に分けることができず、実施にはしばらく時間がかかることとなりました。

一方、上の計画の一つの課題でもあった電子メールを用いた会員通信に関しては、さらに検討を進めていくこととなりました。現在改訂が進んでいる会員名簿には電子メールアドレスが記載されており、この情報を用いてメーリングリストによる連絡体制づくりを考えております。

(船舶技術研究所 大橋厚人)

学会刊行物の案内

保健物理学会から下記の出版物が刊行されています。入手ご希望の方は、学会事務センターにお申し込み下さい(送料・税別)。ただし、学会の研究発表会や企画行事の際には割引価格(括弧の中の価格、学会販売価格)で販売しています。

残部

- 1) ラドン資料集(1994)
971 円(600 円) 12 部
- 2) ICRP Publ.66 新呼吸気道モデル概要と解説(1995)
1,777 円(1,100 円) 51 部
- 3) 電磁界の健康影響に関する専門研究会研究報告書(1996)
1,400 円(1,000 円) 31 部
- 4) 放射線防護実務者の資質ガイドライン(1997)
1,000 円(600 円) 34 部
- 5) ラドンの人体への影響評価専門研究会報告書(1998)
1,700 円(1,000 円) 117 部
- 6) 高度人体ファントム専門研究会報告書(1998)
2,000 円(1,200 円) 119 部
- 7) 新・放射線の人体への影響(1996)
800 円(割引販売なし)

連絡先: 〒113 東京都文京区本駒込 5-16-9 学会センターC21
財団法人日本学会事務センター事業部
TEL 03-5814-5811 FAX 03-5814-5822

催し物案内

第30回放医研シンポジウム「放射線の生体影響とその修飾 - 実験発がんを中心として - 」

日時: 平成10年11月19日(木)・20日(金)

場所: 放射線医学総合研究所講堂

(JR総武線稲毛駅下車東口徒歩12分)

主催: 放射線医学総合研究所

共催: 日本放射線影響学会、日本保健物理学会

参加費: 無料(公開)

プログラム: 演者:

【11月19日(木) 9:40~17:15】

開会の辞: 佐々木 康人(放医研・所長)

共催学会長挨拶: 佐々木 正夫(放影学会)、草間 朋子(保物学会)

(1) 基調講演【10:00~10:45】

座長: 草間朋子(大分看護大)

「放射線被ばくのデトリメント: 概念と評価」

稲葉 次郎(放医研)

(2) 放射線影響の線量・線量率効果【10:45~12:15】

座長: 野村大成(大阪大・医)

1. 幼若期低線量被ばくによる長期的影響

佐々木 俊作(放医研)

2. マウス白血病発生における低線量率放射線の影響

古瀬 健(放医研)

3. 環境科技研の低線量率照射実験計画とその背景

佐藤 文昭(環境科技研)

(3) がんの遺伝的要因【13:30~15:30】

座長: 榎野興夫(癌研)

1. ラット乳腺腫瘍発生に遺伝的感受性

神谷 研二(広大・原医研)

2. 胸腺リンパ腫発生におけるマウス系統差の解析

相沢 志郎(放医研)

3. マウス放射線誘発腫瘍に特異的なゲノム変異

島田 義也(放医研)

4. マウス肺腫瘍発生に関わる多因子遺伝要因の解析

日合 弘(京大・医)

(4) 遺伝子変異/組換え動物の発がん感受性【15:45~17:15】

座長: 丹羽太貴(京大・放生研)

1. scid マウスの放射線感受性と発がん感受性

石井 洋子(放医研)

2. MTH1 遺伝子欠損マウスの作出と発がん感受性

續 輝久(九大・医)

3. ノックアウトマウスを用いた腸腫瘍発生機構の解析

武藤 誠(東大・薬)

【11月20日(金) 9:30~17:10】

(5) がんの修飾要因【9:30~11:30】

座長: 若林敬二(国立がん研)

1. 放射線による乳腺腫瘍の発生とその予防

小野田 真(放医研)

2. カロリー制限による白血病と肝腫瘍発生の抑制

吉田 和子(放医研)

3. 緑茶の肝発がん抑制過程における生物学的諸変化

佐井 君江(国立衛研)

4. 種々の化学物質による消化器発がんの抑制

森 秀樹(岐阜大・医)

(6) 特別講演【11:30~12:30】

座長: 佐々木正夫(京大・放生研)

「New findings of long-term radiation effects on cancer and non-cancer risks among atomic bomb survivors and the need for animal experiments」

Dale L. Preston(放影研)

(7) 内部被ばく発がんとその修飾【13:30~15:00】

座長: 伊藤明弘(広大・原医研)

1. トリチウム水投与による寿命短縮と発がん

山本 修(広島国際大)

2. I-131 内部被ばくによる甲状腺発がんモデルの開発

新田 由美子(広大・原医研)

3. プルトニウムによる実験的内部被ばく発がん

小木曾 洋一(放医研)

(8) 放射線による胎児影響【15:15~16:45】

座長: 井上稔(名大・環境研)

1. プルトニウムの胎児移行と造血障害

久保田 善久(放医研)

2. 胎生期放射線照射による大脳皮質形成障害

伏木 信次(京府医大)

3. p53 依存性アポトーシスによる奇形抑制

法村 俊之(産業医大)

(9) 総評【16:45~17:00】 座長: 荻生 俊昭(放医研)

「総評」: 丹羽 太貴(京大・放生研)

閉会の辞: 稲葉 次郎(放医研・研究総務官)

問合せ先: 〒263-8555 千葉市稲毛区穴川 4-9-1

放射線医学総合研究所、企画室統計係 (TEL:043-206-3026,

FAX:043-256-9616)

第2回 国内EMF 研究者ネットワーク・ワークショップのご案内

場所: 国立がんセンター国際交流会館(大会議室)

日時: 平成10年11月9日(月) 10:00-17:40

今回は WHO の国際 EMF プロジェクト代表の Dr. Repacholi 氏、スウェーデン・カロリンスカ研究所教授の Dr. Ahlbom 氏、および英国 NRPB の非電離放射線研究部部長で、英国で現在進行中の小児白血病の疫学研究における曝露評価の担当者である Dr. McKinlay 氏の講演と、国内試験研究機関が実施している研究

成果についての発表・情報交換が行われます。

会場の都合等もありますので、参加希望者は懇親会への参加の有無を添えて、(財)日本環境協会の堀川さん <vn6j-hrkw@asahi-net.or.jp>までご連絡ください。

【主催連絡先】 環境庁 国立環境研究所

環境リスク研究部門 上席研究官 兜(かぶと)真徳

電話:0298-50-2333 FAX:0298-50-2571

【事務局】 (財)日本環境協会

東京都港区虎ノ門1-5-8 オフィス虎ノ門ビル5F

電話:03-3508-2651

(宇都宮大学 上村佳嗣)

テュビアナ博士講演会

日時:平成10年11月25日(水)午後4時~6時

場所:日仏会館ホール(TEL:03-5424-1141)

JR山手線、地下鉄日比谷線恵比寿駅。ガーデンプレイス方向へ動く歩道終点から3分。

共催:東京放射線生物談話会、日仏医学会、(財)原子力安全研究協会

(入場無料)

講演者:モーリス・テュビアナ(Maurice Tubiana)

(フランス科学アカデミー会員、フランス医学アカデミー会員、ベクレル研究センター所長、元フランス国立がんセンター総長)

演題:フランス科学アカデミーの放射線防護についての考えとその生物学的根拠

目的:フランス科学アカデミーは放射線防護について独自の考えを打ち出し、とくに放射線をますます危険視するICRPの考え方を批判し、報告書Problems Associated with the effects of Low Doses of Ionising Radiations(1997)を出した。テュビアナ博士はこの報告書作成に当たったフランス科学アカデミーの主要メンバーであり、今回キュリー夫人ラジウム発見百年記念行事に来日されるのを機会に、フランス科学アカデミーの放射線防護に対する考えをお伺いする。フランス語で講演、日本語通訳あり。

第7回東京大学原子力研究総合センターシンポジウムのお知らせ

毎年恒例の上記シンポジウムが、本年は11月16日(月)~17日(火)に開催されます。参加の申し込みは不要です。当日直接会場にお越しください。皆様のご参加をお待ちしております。

日時:11月16日(月)10時30分~

11月17日(火)10時00分~

場所:東京大学 山上会館 会議室(本郷キャンパス内)

参加費:無料

連絡先:原子力研究総合センター 事務

03-3812-2111 内2902

11月16日(月)

大会議室

10時30分~12時00分

総合講演「将来の原子力システムを考える」

内藤奎爾(前原子力安全委員)

13時00分~17時10分

総合講演「放射線安全の展開を考える」

国内動向:

(a) ICRP Pub.60の国内制度取り入れについて

金子正人(東京電力)

(b) 医療放射線とその被曝

青木幸昌(東京大学)

国際動向:

(a) ICRPの最近の活動と今後の方向

稲葉次郎(放医研研究所) 小佐古敏荘(東京大学)

若手研究者のコメント

放射線の人体影響、環境放射能、モニタリング、外部被曝線量、宇宙線被曝

・小会議室

16時00分~17時10分

ポスターセッション(共同利用研究成果)

17時30分~ 懇親会

11月17日(火)

・大会議室

10時00分~19時00分

「加速器質量分析法(AMS)の世界—我が国におけるAMS研究」

施設の現状と技術開発、応用研究、AMS研究の将来

・小会議室

10時00分~17時00分

「新しい粒子ビーム生成と応用に向けて」

陽電子、反陽子、ミューオン、重イオン、多価イオン、クラスター、微粒子など粒子ビームの動向

(東京大学 飯本武志)

京都大学原子炉実験所平成10年度専門研究会

最近、個人的見解とも覚えるが、保健物理を構成する会員から学会発表において大きな興味を抱く講演が少ない(伴信彦、ニュースレター、No.16、1998年)あるいは、見識ある先輩から「保健物理よ何処へいく(加藤和明、パリティ、No.13、1998年)」といった、保健物理の将来を危惧する意見が散見される。このような問題は、筆者が保健物理研究センター設立作成案を稲葉氏(放医研)と共に作業した1980年頃に(桂山委員長、将来計画委員会報告、1982年)、また保健物理教育に関しては人材育成も含めて、古くから指摘されている(伊沢委員長、教育計画委員会報告、昭和43年。第16回研究発表会、パネル討論会、1981年)ことでもある。

「歴史は繰り返す」ではないが、最近のニュースレターや、学会の企画委員会報告を素読していると20年程前の議論が保

保健物理研究センター設立の必要性和絡めて繰り返されている。勿論、その設立が実現していないことから、地道な努力は必要と考えられるが、計画案作成から20年程経過している今日、実現されていない原因を直視して対応することも重要である。

保健物理の長所である「研究分野の裾野が広いこと」は、良く言えば総合科学を指向しているといえるが、学会としての方向性が不明確になる欠点にも通ずる。「保健物理は原子力のためだけにあってのではない」との発想から保健物理研究が過去20年間に発展した分野もある。

しかしこのことは、量的にそれほど会員数が増加しているわけでも無く、21世紀においても更に必要となる原子力利用の維持・開発とそれを支える安全性研究の分野である保健物理研究の分散化・形骸化・空洞化に通ずる恐れはないのか。このことが「もんじゅ」や「アスファルト固化処理施設」などの問題として顕在化したのではないかと危惧される。最近の学会誌にはこのような問題を対症療法的・トピック的な問題として取り上げる以外に、原子力分野における地道な安全性研究の議題が極めて少ないと感じるのは筆者のみであろうか。保健物理の底流にはやはり、この分野が勃興した原子力との関係において、今後少なくとも核分裂エネルギーを利用せざるをえない100年程度は、その発展を支える安全性研究・技術を再度、重視する分野として成長することが重要であり、保健物理学会がそれから逃避・遊離することは許されない。この意味から、保健物理学会が保健物理学会のみに収斂するのではなく、原子力学会にも積極的に参画し（現在、学会発表数が20-30件程度と極めて

少ない）、その中で発言権を増やすことが遠回りのようでも保健物理研究センター設立促進にも役立つものと考えられる。また、原子力に従事する現場（特に原子力施設）から情報を隠蔽するのではなく、積極的に発信し、それを学会を中心にして研究課題として取り組み、その成果を流布する教育として人材育成に繋げる三身一体（第16回研究発表会、パネル討論会、pp.93-94、1981年）の形式で保健物理が発展することを再度望むものである。今後の学会の企画に期待したい。こうした活動を広めていくこともセンター設立には不可欠である。

このような考えのもとに管理・研究・教育の情報を発信する場として、筆者は1995年度より京都大学原子炉実験所における専門研究会を毎年、主催している。この研究会は親睦会として機能することを目指していないこと、また予算的制約からも参加者が殆ど発表者に限られていること、更に開催通知も予め掲載していないため少数ではあるが、その分野の実際に研究を推進している若手（生デ・タを出せる人）が多く、有意義な発表・討論が交されている。内容は環境・廃棄物・動態などをキーワードとしたものであるが、今後、解体・放射線管理など21世紀に向けての重要な保健物理的研究の課題を取りまとめる研究会としても継続していく予定である。

以下には保健物理研究課題としての参考のために、1995年以降の研究会での発表演題をリストにした。

また今年度は同じ頃から開催されているトリチウムに関する研究会と合同で開催するため、そのプログラムを掲載します。興味のあるかたは連絡いただければ参加可能です。

12) 長崎晋也(東大) ベントナイト粒子への3価ランタニド、アクチニド元素の吸着
13) 油井三和(動燃) ベントナイト及び岩石中の核種移行デ・タ
14) 高橋知之(原研) パラメ・タ不確かさの解析
15) 津村昭人(農・農環技研) 微量元素の水田土壌から白米への移行係数
16) 保田浩志(放医研) 移行係数(土壌・植物)の見かけの濃度依存性について
17) 森田重光(動燃) 土壌環境中における長半減期放射性核種の移行挙動について
18) 田上恵子(放医研) 湛水条件下の土壌中におけるテクネチウムの挙動について
19) 塚田祥文(環境研技研) 大気における粒子状およびガス状ヨウ素について
20) 吉田聡(放医研) 日本の土壌に対するヨウ素の吸着について
21) 内田滋夫(放医研) 砂質土壌中における放射性ヨウ素(I - および IO₃ -)の移動に関する研究
22) 福井正美(京大・炉) 土壌中放射性ヨウ素の移行評価に Kd モデルは妥当か
1996年度 (水中ラドン専門研究会)

1) 長尾誠也(原研) 猪苗代湖底堆積物における放射性核種及び重金属の挙動
2) 大崎 進(九大) 河口堆積物中における放射性核種の移動
3) 高松武次郎(国立環境研) 酸性降下物に起因するイオウの土壌中での形態変化
4) 結田康一(農・農環技研) 臭化メチル等農薬起源臭素の土壌・作物・水・大気系での動態
5) 伏脇裕一(神奈川県・環境科学センター) 農薬の土壌への吸着特性
6) 清水芳久(京大・工) 土壌・地下帯水層中の有機汚染物質の収着・脱着について
7) 前田守弘(農・農業研究センター) 土壌中ヨウ素の吸着特性
8) 颯田尚哉(京大・炉) 不攪乱土壌中における¹³⁷Csの分布と挙動
9) 藤川陽子(京大・炉) 岩石試料へのCs, Se等の吸着機構
10) 出光一哉(九大・工) コンクリート、モルタルへのCsの吸着および拡散
11) 大貫敏彦(原研) スメクタイトへの元素(Cs, Sr, Co, U, Np)の吸着

1) 長谷川園彦(静大・理) 地下水中のラドン濃度の測定法
2) 斎藤正明(都・産業技術研) 水中ラドン抽出測定における濃度計算の注意点
3) 徳山秀樹(福井県環境センター) 福井県若狭地区における飲料水中のラドン濃度
4) 静間清(広大・工) α, γスペクトロメトリによる水中ラドン濃度の測定：広島県における湧水、地下水中のラドン濃度分布
5) 柚木英志(岡山県環境センター) 人形峠周辺の井戸水・河川水中の²²²Rn濃度
6) 古田定昭(動燃) 人形峠周辺における水中ラドン濃度
7) 堀内公子(大妻女子大) 温泉水中のラドン濃度
8) 小村和久(金沢大) 旧尾小屋鉱山を利用した各種地球科学観測と辰口で観測されたラドン異常
9) 安岡由美(神戸薬大) 六甲山系における天然水中のラドン濃度について
10) 高橋誠(地質調査所) 地震予知のためのラドン観測
11) 米田稔(京大・工) ラドン濃度の測定による地下水と河川水の関係の推定
12) 小前隆美(農・農工研)

水文解析指標としてのラドン 13) 西村進 (京都自然史研究所) 地下水中のラドンと放射非平衡状態 14) 藤高和信 (放医研) ラドン娘核種の降雨沈着に伴う現象 15) 藤波直人 (京都府保環研) 降水による大気中のラドン娘核種の取り込みについて 16) 下道国 (岐阜医短大) 水中のラドン濃度 - 中部地方の測定値を中心として 17) 柴田せつ子 (大阪府大) 大阪周辺の天然水のラドン濃度 18) 大沼章子 (愛知県衛研) 愛知県における地下水ラドン濃度について 19) 望月定 (室蘭工大) 北海道二股温泉の冷泉水中のラドン濃度 20) 森嶋彌重 (近大・炉) 三朝地域における水中ラドン濃度 21) 福井正美 (京大・炉) 地下水中ラドン濃度とリスク評価の不確定性 1997 年度 (環境中微量物質動態専門研究会) 1) 夏堀雅宏 (北里大・獣) ラットにおける K、Rb、Cs の体内動態 2) 伊藤伸彦 (北里大・獣) 山菜への ^{137}Cs の移行 3) 吉田聡 (放医研) 森林中の植物・きのこへの Cs-137 及び微量安定元素の移行 4) 塚田祥文 (環科技研) 松林における基質からきのこへの放射性および安定 Cs の移行 5) S. Ambe (RIKEN) Influence of Acid Rain and Organic Matter on the Adsorption of Trace Elements on Soil. 6) 津村昭人 (環科技研) 土壌 - 水系における微量元素の動態 7) 長尾誠也 (原研) 湖底及び海底堆積物からみた天然環境における Cs-137、Pu-239,240 の動態 8) 近藤邦男 (環科技研) 汽水湖尾根沼の生態系内における放射性核種等の挙動 9) 徳山秀樹 (福井県原環監センター) 宇宙線生成核種 ^{22}Na のバックグラウンドレベルの季節変動 10) 内田滋夫 (放医研) 表層土壌における Tc の挙動 - パッチ法による Tc の分配係数 - 11) 田上恵子 (放医研) 土壌中におけるフォールアウト Tc-99 の挙動 12) 関李紀 (筑波大・理) 土壌中の放射性ヨウ素について 13) 結田康一 (農水省・農環技研) ヨウ素の野外環境下での土壌中動態 14) 村松康行 (放医研)	放射性物質ヨウ素(I-129)及び安定ヨウ素(I-127)の環境中での分布と挙動 15) 山口登志子 (広大・工) 土壌内における農薬の挙動 16) 平田健正 (和歌山大・工) 土壌・地下水汚染と対策 17) 寺井邦雄 (島根県) 環境中における ^{137}Cs の動態 - 雲仙普賢岳火砕流での ^{137}Cs の再浮遊 - 18) 馬原保典 (電中研) 原爆フォールアウト Cs の土壌・底質内での環境動態と再分布 19) 駒村美佐子 (農・農環技研) 水田土壌中の ^{137}Cs の減衰 20) 松永武 (原研) 河川水中における放射性セシウムの移行挙動 21) 富岡典子 (国立環境研) 微生物によるセシウム-137 の濃縮 22) 木村捷二郎 (大阪薬大) 若狭地区表層土壌中の ^{137}Cs の分布 23) 嶋田尚哉 (京大・炉) 表層土壌中における Cs 挙動に関する一考察 24) 福井正美 (京大・炉) 室内とフィールドにおける土壌中 Cs の挙動 25) 天野光 (原研) チェルノブイル周辺環境中長半減期放射性核種の動態 26) 高橋知之 (原研) チェルノブイル原子力発電所近傍土壌における放射性核種の分布と動態 27) 大貫敏彦 (原研) ウツリ床付近における元素の分布と動態 1998 年度 京大原子炉実験所 平成 10 年度専門研究会「保健物理と放射能動態」及び「水素同位体の環境動態」合同開催プログラム 11 月 24 日 (火) 座長 今泉 洋(新潟大 工) 10:30 ~ 10:50 柿内 秀樹(九大 理) 微生物を用いたトリチウム除去装置の基礎研究 10:50 ~ 11:15 一政 祐輔(茨城大 理) 土壌環境でのトリチウムガスの酸化および酸化微生物 11:15 ~ 11:40 岡井 富雄(九大 工) 大気中トリチウム濃度の経年変動 11:40 ~ 12:00 齊藤 眞弘(京大炉) トリチウム摂取マウスでの骨髄線量評価 座長 齊藤 眞弘(京大炉) 13:00 ~ 13:20 佐久間洋一(核融合科学研) トリチウム測定用環境水試料前処理の簡素化 13:20 ~ 13:40 太田雅壽(新潟大 工) パー	炉 2 管による HT-HTO の分離条件の検討 13:40 ~ 14:00 河野孝央(核融合科学研) LHD 排気系におけるトリチウム除去装置の開発 14:00 ~ 14:20 今泉洋(新潟大 工) エーテルの α 炭素上の水素の T-for-H 交換の可能性 座長 百島則幸(九大 理) 14:20 ~ 14:40 植田脩三(原研) 核融合炉の放射化ガス 14:40 ~ 15:10 野口宏(原研) 事故時に放出されたトリチウムに対する公衆被ばく線量評価コードの開発 15:10 ~ 15:35 武田洋(放医研) 環境放射能動態解析システム(ERMA)によるトリチウムの環境および生体内動態のシミュレーション 座長 福井 正美(京大炉) 15:50 ~ 16:15 徳山秀樹(福井県原環監センター) 原子力発電所から放出された HTO の降雨による洗浄沈着 16:15 ~ 16:40 小林和容(原研) 日米協力による米国ロスアラモス研究所トリチウムシステム試験施設(TSTA)における計画的室内トリチウム放出試験(), () 16:40 ~ 17:30 奥野健二(静岡大 理) 核融合炉におけるトリチウム廃棄物除染・処理に関する研究開発の現状と今後の課題 11 月 25 日 (水) 座長 中村 清宣(原研) 9:05 ~ 9:25 佐藤隆一(原研) グローブボックス解体における表面密度と空気中濃度の推移 9:25 ~ 9:55 村田幹生(原研) 再処理施設のセル換気系における放射性物質の挙動 9:55 ~ 10:15 木内伸幸(原研) コンクリート等の落下に伴う発塵に関する実験 10:15 ~ 10:40 富居博行(原研) 原子炉解体で発生する放射性エアロゾルの挙動 座長 松本史朗(埼玉大 工) 10:50 ~ 11:15 上養義朋(理研) 理化学研究所の放射線施設と安全管理 11:15 ~ 11:35 箕輪雄資(原研) 高温工学試験研究炉(HTTR)における放射線管理設備 11:35 ~ 12:00 遠藤章(原研)
--	--	--

原研電子線形加速器施設における空気及び遮蔽体中の誘導放射能	座長 加藤 正平(原研) 14:25 ~ 14:50 三浦太一(高工ネ研) 高エネルギー陽子加速器施設周辺に生成する放射能とその動態 14:50 ~ 15:20 村松邦博(日本原電) 敦賀発電所における放射性廃棄物の放出管理状況 15:20 ~ 15:50 福井正美(京大炉) 研究炉(KUR)における気体廃棄物の放出管理	と迅速測定の試み 若林源一郎(九大 理)ゲル懸濁法を用いた環境中 14C 簡易測定法 田上恵子(放医研)水中のウラン濃度の ICP-MS 法による直接測定 内田滋夫(放医研)水中 Tc-99 の迅速・簡便な分析法の検討 井伊博行(和歌山大)同位体元素による表流水の解析 高橋知之(原研)チェルノブイル原子力発電所近傍土壌における核種移行解析 (京大炉 福井正美)
- 動燃事故により放出されたセシウム測定 - 13:50 ~ 14:25 清水武彦(核燃料サイクル開発機構) アスファルト固化処理施設の火災・爆発事故時の核種挙動	以下、誌上発表 一政満子(茨城大 理)土壌細菌によるトリチウムガスの酸化 木村捷二郎(大阪薬大)大気中 H ₂ の濃度変動	(神戸薬科大学 安岡由美)

会員コーナー

シンポジウム「保健物理の大学院教育の現状と将来」に参加して

残暑厳しい 8 月 27 日に、近畿大学で上記のシンポジウムが開催されました。近年、修士課程が大規模化することにより、大学院修士課程を卒業後に企業へ就職していく者も多くなってきました。このため、企業のニーズにも応えられる教育が必要となってきています。一方、社会人の大学院の入学者も増えてきたと言われています。また、放射線及び放射性同位元素の利用は、産業の様々な分野で不可欠なものになっており、放射線を安全に使っていくためには、放射線防護に従事する人材が必要となってきています。このような状況のなかで、保健物理の大学院教育の現状と将来について知りたく思い、このシンポジウムに参加しました。

まず、名古屋大学の原子核工学専攻の飯田先生が工学系大学院教育について話され、金沢大学理学部付属低レベル放射能実験施設の村先生が理学部系大学院教育について話されました。保健物理の各分野で、中心的な役割を担っていく人材の育成のための教育がどのようなシステムで行われているのかを伺うことができました。

次に、名古屋大学医学部保健学科の前越先生が、医科系大学院教育、特に保健衛生学専攻（放射線技術学専攻の学部卒業生等受入）について話されました。修士課程では、優れた研究者の養成はもとより、高度な専門知識・能力を備えた医療技術者の養成を目的としているとのことで、医療現場におけるこの新しい分野出身の人材の第一線での活躍は、大いに期待されています。さらに、修士課程に一部夜間コースを設け、医療技術者等専門的職業人の再教育も行う予定とのことでした。

さらに、大学院教育の新しい流れの一つとして、社会人が大学院での再教育を受ける環境が整いはじめており、ここで育った人材が、社会で指導的役割を担って活躍していくのではないかと期待を感じるものでした。

いずれの講演も将来の大学院教育の指針と成りうるもので、私にとっては大変有意義なシンポジウムと成りました。

若手研夏期セミナー「環境ホルモンに関する勉強会」に参加して

平成 10 年 9 月 12、13 日岡山県上高原村動力炉・核燃料開発事業団人形峠事業所(現・核燃料サイクル開発機構人形峠環境技術センター)において、日本保健物理学会若手研究会主催の夏期セミナー(勉強会)が開催された。今回は初めて岡山県で開催されるということもあり、少々交通の便が悪く参加者が限られるのではと懸念されたが、勉強会テーマが今話題の「環境ホルモン」であること、また濃縮原型プラントの施設見学が出来ることもあり関東、九州など遠方からの参加者も加わった。今回のテーマは保健物理とは直接関係がないと思われたが、今後研究が進むにつれて何らかの関わりを持つであろうと考え、講師に岡山大学医学部衛生学教室・小河孝則先生をお招きしての会となった。

2 日目 9 時から始まった勉強会は、主査石森氏(動燃)より基礎知識として最近 3 か月の環境ホルモン関連記事について紹介があり、続いて小河先生よりいくつかの資料を交えながら、化学物質毒性に関する概論について、労働安全衛生法の分類、許容濃度の考え方、しきい値などわかりやすく説明があった。次に内分泌攪乱化学物質(環境ホルモン)問題に関する概況として、毒性、曝露量など現段階での研究状況および今後の動向についての説明があった。それによると、人体への影響評価に関しては、疫学的調査が困難であることや、十分な事例がないこともあり、放射線影響のように明確には確立しておらず、また化学物質に対する環境問題であることから関係省庁間で統一性がなされていないこと、毒性物質を検出するにあたり機関が限定されること、費用面での問題、学校での教育不足(特に医学部)などが挙げられた。続いて若手研からの発表として、橋本氏(動燃)より環境ホルモンと放射線の影響比較についての話があり、環境や人、社会的な影響の類似点、また評価、管理方策の違いについて説明があった。最後の総合討論においては、時間が限られていたことは残念であったが、ホルモン自身の質による違い、代替物質の開発、焼却設備の機能向上、リスクベネフィットの考え方など広範囲に意見交換を行ない、その熱心さに若手研究会員の関心の高さがうかがえた。

今後の課題としては、放射線リスクにおいて化学毒性を考慮すると何らかの不整合が生じる可能性があること、またR I 廃棄物燃焼時のダイオキシン問題、報道に対する的確な対応など、まだ漠然としているが、放射線影響、放射線管理の観点からこの問題を頭の片隅におくことが必要であると思われる。

最後ではありますが、勉強会開催にあたり、休日にもかかわらず講演をお引き受け頂いた小河先生、また会場の提供、施設見学など動燃人形峠事業所関係者の皆様に、大変お世話になりましたこと厚く御礼申し上げます。

(近畿大学原子力研究所 稲垣昌代)

防護、放射線安全管理に関する情報・話題や意見、関連学会・研究会の開催案内などタイムリーな情報を掲載します。会員相互の情報提供の場として利用して頂くために、多くの会員からの積極的な原稿を期待します。投稿内容などについては、日本保健物理学会事務局および最寄りの企画委員まで連絡ください。投稿原稿は、電子メールあるいはフロッピーディスクで集め、企画委員会のインターネットグループによって編集印刷されます。(電子メール送付先:kai@oita-nhs.ac.jp FD 送付先:大分県津原町廻廻野 2944-9 大分県立看護科学大学環境科学 甲斐倫明)

その他

Newsletter への会員投稿のお願い

次回の Newsletter は 1999 年 1 月に発行の予定です。放射線

発行：日本保健物理学会企画委員会
編集：企画委員会インターネットグループ
担当：江田和由